

4. 「日本語＝タミル語同系説」の周辺をめぐって

長田俊樹

ここでは児玉・家本両氏のドラヴィダ言語学の立場や山下氏のタミル古典文献学の立場とは違った角度から大野説を検討したい。というのは、筆者の専門はアーリア語族、ドラヴィダ語族とともに、インドのもう一つの語族であるムンダ語族の言語学的研究であって、ドラヴィダ語についてほとんど知らず、ドラヴィダ言語学の立場から家本・児玉両氏以上には何も語れないという筆者の限界があることを、まずおことわりしておかねばならない。ただ、児玉氏も指摘するように大野説が文化史をかなり重要視しており、こうした問題にもふれておいたほうがよからうという判断から、あえて筆者の専門外である考古学や民族学についても言及しながら、総合的に検討を加え、この「日本語＝タミル語同系説」を検証するという企画の責任を果たしたいと思う。なお、とくにことわらない限り、頁数は『日本語の起源新版』の該当箇所を示す。

それでは筆者の専門である言語学からみた問題点を、児玉氏や家本氏の指摘をまとめながら述べることから始めたい。ただし、ここではおもに家本氏が指摘した、助詞や助動詞といった文法をめぐるタミル語と直接関わる数々の問題点は除き、大きな点に絞って次の三つについて指摘しておきたい。

まず第一に、児玉氏が指摘するように、タミル語と日本語の言語だけを対象として比較したのではなく、文化史と関わる問題を多く扱っているのは比較言語学の王道からは逸脱していることを指摘しておく必要がある。とくに文化史の問題では、大野説に不利な事実には言及しないために、言語学者以外からの批判も多く、それがより大野説の否定的見解を増幅させているように思われる。そして第二に、言語の比較についていえば、児玉・家本両氏が指摘するように、日本語と比較する際にタミル語だけを取り上げるのではなく、言語学的に系統関係が証明されているドラヴィダ語族全体を視野にいれて議論すべきであろう。ドラヴィダ語全体を視野に入れることと、大野教授が批判した「ドラヴィダ語の祖形を用いて比較する」(32頁) こととを混同してはならない。第三に、家本氏が指摘するように、オーストロネシア語基層説によって、はたして日本語の歴史が解明されるのかという点について、大野教授の説明は不十分である。

そこで、第一については大野教授が証明の材料とした文化事項を取り上げて、後で詳しく検討することとし、第二、第三の問題に関わる具体的な点をここで指摘しておこう。

第二に関連して、最初に指摘しておかねばならないことは大野説に好意的なドラヴィダ語学者として登場する(35—36頁) ユトレヒト大学のズヴェレビル教授は大野説を全面的には支持していないことである。ズヴェレビル教授はたしかに日本語とタミル語(あるいはドラヴィダ語)が多くの類似を示す点について同意されているが、大野教授が展開するタミル語伝播説には懐疑的である。ズヴェレビル教授はインドから直接伝播した可能性はきっぱりと否定しており、むしろ長いスパン、つまり現在の比較歴史言語学の方法では証明できないは

ど長い時間を想定すれば、ドラヴィダ語と日本語との系統関係の仮説が認められる可能性を示唆したにすぎない。⁽²⁾ しかも、ドラヴィダ語とウラル・アルタイ語の系統関係については、すでに多くの学者が指摘するところである。⁽³⁾ つまり「タミル語伝播説」と「ドラヴィダ語＝ウラル・アルタイ語同系説」とでは、同じように日本語とタミル語の類似性を指摘しても、まったく解釈が異なってしまうことになる。

誤解を恐れずにいえば、われわれ全員が共時的なレベルにおいて、タミル語と日本語が多くの類似点をもつことには賛成している。言語学がこの類似点を説明しようとするとき、次の三つのケースを想定する。

- (1) 系統的關係、つまり同じ祖語から分岐した姉妹關係による類似。
- (2) 地理的に隣接していることから生じる借用關係による類似。
- (3) 偶然的類似。言語の普遍性に関わる類似や類型論的な類似を含む。

大野説もズヴェレビル教授の指摘と同様に、(1)のケースを言っているように思われるかもしれないが、直接古タミル語（あるいはプレ・タミル語）が伝播し、基層言語にかぶさってきたのが日本語であるという大野説は、基層語の影響という問題があるものの(2)のケースを想定していることになる。そしてこの「タミル語伝播説」について、一部のタミル人学者をのぞけば世界的にみてもほとんどの研究者は反対するであろうと筆者は断言してもよい。というのは南インドと日本を結ぶのはあまりにも遠すぎる。これは(1)の可能性を否定したことを意味しない。ズヴェレビル教授が指摘するように、現在の比較言語学では検証し得ない程度の時間をさかのぼれば、日本語がウラル・アルタイ語に属するかどうかの問題はさておき、日本語とタミル語がたとえば「ドラヴィダ・ウラル・アルタイ祖語」といった共通の源から分岐したと想定することに誰も反対しないし、児玉氏が指摘するように、二つの言語に親縁関係がないということも証明する手だてはないのである。

ところで、大野教授が「タミル語伝播説」にこだわらず、広い意味での同系説への視野をもちながら論を展開すればもう少し違った反応が期待できたはずである。そのためには、タミル語に固執するのではなく、ドラヴィダ語全体に目を配るべきである。これはドラヴィダ祖語との比較をせよということではなく、同じタミル語と日本語を取り上げるとしても、ドラヴィダ語のなかで、あきらかにタミル語だけが発達させた特徴を比較の際に排除することができるという意味において重要なのである。また、そうしたことが可能なほど、ドラヴィダ語学の蓄積は多大なものと聞く。⁽⁴⁾

さて、次に基層言語説について、その具体的な問題点をみておこう。

大野教授は日本語とタミル語の相違を基層言語によって説明しようとしている。そして具体的には基層言語としてオーストロネシア語族の「ポリネシア語族の一つに近い音韻組織を持っていた何らかの言語」(217頁)を想定している。その理由として次の二つをあげている。

- (1) オーストロネシア祖語の母音は四つで、原始日本語の四母音とはほぼ一致する。
- (2) サモア語を例に挙げて、簡単な子音組織で、二重子音や三重子音をもたず、母音終止がはなはだ多く、原始日本語とおおよそその特徴が一致している。

まずこの二点はオーストロネシア語族の歴史をみると、ずれがあることを指摘しておき

(5) たい。母音について、原始日本語が四母音であったかどうかについてはともかくとして、四母音をもつのはオーストロネシア祖語で、大野教授のあげるポリネシア語族は五母音をもつ。一方子音についていえば、たしかにサモア語は流音が一つしかなく、二重子音もなく、開音節で終わっているが、これはオーストロネシア語族全体をながめると後の発達で、オーストロネシア祖語では子音終わりも二重子音も閉音節終わりもみられるのである。さらに、大野教授が引用したデンプヴォルフによれば、オーストロネシア祖語にはタミル語にみられる反り舌音がみられるというふうに、⁽⁷⁾基層言語を想定するとしても、オーストロネシア祖語に近い言語なのか、ポリネシア語に近い言語なのかで、(1)と(2)はうまく両立しないのである。⁽⁸⁾

(1)と(2)が両立しないことに加えて、もし大野教授がいうようにポリネシア語族に近い言語を基層言語とすると、ここでもまたオーストロネシア語史とずれが生じる。ハワイ大学の言語学者プラスト教授の説にしたがえば、サモア語の成立年代は紀元前1000年前後で、東部ポリネシア語の成立はさらに新しく紀元前後だという。⁽⁹⁾またオーストラリア国立大学のポーリー教授とロス教授によると、ポリネシア語の成立はやはり紀元前1000年頃であるという。⁽¹⁰⁾縄文時代は紀元前一万年から紀元前三世紀前後とみられているが、もし大野教授がいうようにポリネシア語が基層語だとすると、縄文時代晩期以後に、ポリネシア語は日本にやってきたことになる。こうした可能性がまったくないわけではないが、そうすると、このポリネシア語が入る以前の日本で話されていた言語はどういったものなのか、大きな問題につきあたることになる。またオーストロネシア祖語の時代に基層言語が広がったとしたら、上で述べたようにオーストロネシア祖語では反り舌音などかなり複雑な子音構造をもっていることから、タミル語の子音組織などが簡略化された理由とは残念ながらならないのである。

日本語とタミル語の相違をオーストロネシア語という基層言語の影響で説明しようとするにはオーストロネシア語史とのてらしあわせが必要である。またオーストロネシア語を基層言語と認めたとしても、いくつか説明がつかないものがある。たとえば、上代日本語の母音調和の現象はどう説明つけるのであろうか。⁽¹¹⁾タミル語にも、オーストロネシア語にも母音調和はみられないはずで、初期の大野説では原タミル語が日本に広がった後、アルタイ語系統の一言語が朝鮮半島を通して日本の支配層の言語として、金属器、稲作、高度の機織をもっ⁽¹²⁾てはいつてきたとされ、それが母音調和をもちこんだとある。しかし、今回展開される説は金属器、稲作、機織も南インド起源とみなし、はっきりと言明はしていないが、アルタイ系の言語が日本語の成立に関与していないとの説をとっているように思われる。この母音調和が「タミル語＝アルタイ語同系説」の一つの柱をなしていることから、ぜひ説明が望まれるところである。

以上、言語学の立場から、日本語と比較する対象言語の選定に関する問題と基層言語の問題について述べた。細かいタミル語と日本語の対応に踏み込む前の段階でも、まだまだ大野説が解決しなくてはならない問題が残っているように筆者には思えてならない。なお、山下氏の指摘に筆者がとくにつけくわえることはなく、古典タミル語から、サンスクリット語、そして現代タミル語まで、広い知識に基づく山下氏の指摘に対する大野教授の反論が待たれるところである。

言語学からはなれ、自然人類学や考古学、そして民族学の立場からみると、言語学の問題以上に、大野説の反証がみいだされるように思う。それは大野教授があきらかに自分に不利な証拠に目をつぶってしまわれるからではないかと感じられるほどで、大野説では説明できない反証にはまったくふれていない。大野教授はなによりもまず「日本語＝タミル語同系説」を優先させんがため、類似する文化要素だけを取り出して並べるため、かえってこじつけているように疑われてしまうように思う。むしろ反証は反証として、今後の研究の課題とするとか、初期の大野説のようにさらにアルタイ系の言語が入ってきたとして説明を試みる方が読者は納得するのではないだろうか。またより基本的なことをいえば、文化事項の伝播をいうためには、その文化事項の分布をあげ、その時代をしめし、そして文化事項の特徴を分析して、他の地域よりもあきらかに南インドから来た蓋然性が高いと提示してはじめて、多くの人に受け入れられるように思う。それほど日本文化との類似だけをあげれば、「日本文化のふるさと」をうたい文句とする場所（たとえば雲南や東南アジアなど）は多く、これまでにいろんな人が指摘してきたのである⁽¹³⁾。

まず何よりも動かせない反証は自然人類学者による人骨の研究であろう。これは「タミル人渡來說」の立場からいえば、致命的な欠陥である。埴原教授らの研究によると、縄文人は南方系古モンゴロイドであり、弥生人は北方系新モンゴロイドであるという⁽¹⁴⁾。ところがタミル人についてみると、リスレーによればドラヴィダ人種といい、ハットン⁽¹⁵⁾はドラヴィダという言語名からの人種名を排し、まずカーストによって差があることを指摘した後、高いカーストの人は地中海人種、低いカーストはオーストラロイドとみている⁽¹⁶⁾。いずれも、モンゴロイドは登場しない。もちろん、大野教授は人種と言語と文化の三項をアメリカの黒人が英語をしゃべる例をあげて、混同してはいけないと戒めている（7－8頁）。しかし、「タミル人渡來說」に立てば人種と言語と文化は一体で、言語と文化だけが日本にもたらされたと考えるのは誰の目からみてもおかしい。まして墓制一セットが南インドからやってきたとするなら、その墓に埋葬されている人がタミル人であると考えるのはごく自然のことである。しかしながら、残念ながらタミル人の人骨はみつかっていない。

ではモンゴロイドの人骨しかみつからないことと、大野説の妥協点をみつけるとすれば、次の三つのケースが考えられる。

- (1) 南インドに行って、タミル語を習得したモンゴロイドの渡来。
- (2) 日本と南インドの中間に、タミル語地域があって、そこでタミル語を習得したモンゴロイドの渡来。
- (3) たまたまタミル人の骨が発掘されていないケース。

(1)の紀元前数世紀に、日本語を変えてしまうほどの人間が南インドにいてタミル語を習得し、また日本へ渡来するとの想定はほぼ不可能であろう。(2)の場合には、残念ながら日本と南インドの中間地に、タミル語が話されていた形跡はみつかっていない。また筆者の知る限り、史料からタミル語を話すモンゴロイドがいたことが指摘されたことはないし、今もタミル語を話すモンゴロイドはいない。(3)についていえば、そうかもしれないとしかいえないが、上述の埴原教授の弥生人と縄文人の二重構造モデルが提唱されるほど研究の進んでいる

分野で、発見されていないだけであるという主張がどれだけ有効なのかは専門家に聞くしかない。いずれにせよ、それまでの日本語を根底からくつがえすほどのタミル人が渡来したと考えるならば、一つぐらいタミル人らしき骨がみつかったもおかしくないと思うのは素人考えなのだろうか。

何度も繰り返すように、筆者には「タミル人渡來說」がすべての破綻を招いているようにみえるというのは言い過ぎだろうか。アジア全体の地図を開いてみればわかるように、海路南インドから日本へ来るためには、現在でもタンカーの難所と言われるマラッカ海峡を越えてこなくてはならない。大野教授が指摘するポートピープル（225頁）やオーストロネシア語族のマダガスカル島への拡散（13—14頁）のように、一度船に乗ったら海流などで漂流できる場合とは違い、マレー半島やスマトラ島という障害物が存在するのである。その日本と南インドを結ぶ際に障害物となるマレー半島やスマトラ島にタミル人がいたという可能性を示す痕跡は大野教授が指摘するように巨石文化（223—225頁）を除けばほとんどない。しかも東南アジアの巨石文化は南インドから伝播したという説がかならずしも認められているわけではない。⁽¹⁷⁾ そうすると、タミル人たちはただひたすらマレー半島にも目をくれず、スマトラ島にも興味を示さず、日本や朝鮮半島を目指したことになる。上であげたポートピープルについては、経済的・政治的動機づけがあるうえ、いくらポートとはいえ二十世紀のできごとである。また、マダガスカル島への移住はオーストロネシア民族が海洋民であること、オーストロネシア人の飛躍的拡散の時期である紀元後600年頃におこったことなど、⁽¹⁸⁾ どちらにもそれなりの理由がみつかる。タミル語の古い文献に、日本や朝鮮半島に関する記述がみつければ日本を目指す理由もある程度つかめるかもしれないが、今のところ大野教授もこうした記述に出会っていないようである。

この「タミル人渡來說」の欠陥には大野教授自身も気がついているふしがある。というのは、「南インド文明の東シナ海・黄金海域への流入（B.C. 7—B.C. 2世紀）」（241頁）という図には台湾と中国の沿岸部、朝鮮半島、九州など西日本の一部しか載せておらず、南インドから台湾までの流入経路はどこにも掲載していないのである。大野教授が「タミル人渡來說」を堅持するおつもりならば、タミル人はどのような経路で日本へやってきたのか、マラッカ海峡を越えてきたのか、はたまたスマトラ島やジャワ島を迂回したのか等、はっきりした海路を示すべきであろう。またいずれの経路をとるにせよ、南インドから出航して最初に見える陸地が日本ではないことはあきらかな以上、最初の陸地に上陸したかどうかも含め、なぜタミル語はその地に定着せず、さらに日本を目指したのか、その理由を提示すべきであろう。

さらに、海上交通路や船についての大野教授の説明はかなりのルール違反である。エジプトの大きな船の話を書いたり（227頁）、紀元二世紀にローマ皇帝が南インドを経て中国の皇帝に親書をもたらしした例をあげて、「当時の東南アジア、西南太平洋の海上交通の盛んなさまを想見することができる」（227頁）といったりするが、問題となっているのはエジプトや紀元二世紀の話ではない。また中国と南インドの交易ということで言えば、すでに漢の武帝の時代（紀元前二世紀頃）におこなわれていたことは東南アジアの概説書に書いてあり、⁽¹⁹⁾ も

う少しタミル人渡来説に有利になるような事実にはどん欲になるべきであろう。

そうした例の一つあげると、タミル語を含むドラヴィダ語の《船》を意味する語は Hor-nell (1920) の指摘以後、オーストロネシア語研究者はオーストロネシア語からの借用とみて⁽²⁰⁾いるという点である。そのドラヴィダ語からみていくと、*DEDR3838*につぎの語彙がみられる。

Tamil	paṭavu, paṭaku	'small boat'
Malayalam	paṭavu, paṭaku	'ship, large boat'
Kannada	paḍahu, paḍagu, paḍangu, haḍagu, haḍaga	'ship, large boat'
Tulu	paḍavu, paḍa haḍagu, haḍaga	'boat' 'ship'
Telugu	paḍava	'boat'

一方、このドラヴィダ語に対応するオーストロネシア語をみると、マレー語 **padaw** 古ジャワ語 **paraha** などがあるが、オーストロネシア祖語 ***paḍagu** の語形がもっともちかい。オーストロネシア研究者によれば、紀元前二千年紀の中ごろから紀元前1000年頃までに、そのころ南インドで話されていたが、今は消滅してしまったオーストロネシア語からドラヴィダ語は借用したとみて⁽²¹⁾いる。大野教授はもっとこの借用語に注目なさるべきである。もちろん、海上民であるオーストロネシア人から、ドラヴィダ人が船とともに、この語を借用したとの見解は崩しにくい、タミル人が早くから船を使って海を行けば、オーストロネシア人の住むところに到達することを知っていたことの証拠にはなるはずである。ただこうした事実をもってしても、なぜ日本を目指したのかについては答えはみつからない。

次に考古学へ移ろう。筆者はまったく考古学についてはずぶの素人である。したがって、考古学者が書いたものを読んで理解した範囲での指摘しかできない。ただ考古学の成果、あるいは発掘の成果は考古学者でなくとも、こうした問題に関心のある言語学者は積極的に利用すべきだと筆者自身は考えるので、あえて素人を承知の上、大野説を検討したい。この点にかんし、大野教授は『月刊日本語論』1994年11月号に、考古学と言語学との噛み合わせがうまくいかないことを考古学者の責任として、かなりはげしく考古学者への批判を述べて⁽²²⁾いるが、この批判は次の点であたっていない。まず考古学者のなかに、オーストラリア国立大学のベルウッド教授のように、考古学的裏付けのない空白部分に対してオーストロネシア比較言語学の成果を積極的に利用している学者を忘れてはならない。⁽²³⁾そして皮肉なことに比較言語学を積極的に利用するために、考古学者から批判を浴びていることも大野教授は理解を示すべきである。⁽²⁴⁾さらに、考古学者が比較言語学の成果を利用しないことへの批判をする前に、大野教授御自身が果して考古学の成果を利用なさっているのか、自問なさる方が先ではなかろうか。大野教授は東南アジアの巨石文化について、南インドにあるマイソール大学のラマンナ博士著『南インドと東南アジアの巨石文化—その比較研究』の一冊でかたづけようとしているのはあまりにも安易にみえるのは筆者だけではないと思う。

では具体的な問題に入ろう。その多くの問題点については、現在もっとも精力的に活動中の考古学者佐原眞歴史民俗博物館副館長が、大野教授と民族学者大林太良教授や国立民族学博物館館長佐々木高明教授らとのシンポジウムのなかですでに指摘している。そのシンポジウムの模様が一冊の本となっているので、その本をみながら指摘しておこう。⁽²⁵⁾

このシンポジウムのなかで佐原教授が指摘した疑問点のうち、いくつかについては今度の本で訂正されている。たとえば、旧説ではタミル語の伝播は縄文時代中期とされていたのが、臼や杵はせいぜい縄文時代晩期にしかさかのぼれないという指摘から、今度は縄文時代晩期にタミル語の到来を設定している。また箸についてもせいぜい五、六世紀にしかさかのぼれないという指摘⁽²⁷⁾で、今回は対応語リストからはずしている。しかし、すべての指摘が受け入れられたわけではない。たとえば、南インドと日本の甕棺の比較について、九州の甕棺についての橋口達也さんの研究をひいて、時代とともに蓄えるための壺が埋葬用の甕棺に変化していった説を佐原教授は紹介しているにもかかわらず、こうした指摘は今度の『起源』にはいっさい言及されていない。また甕棺にくわえて、今回墓制一セットが南インドからやってきたと大野教授は主張するが⁽²⁸⁾（116頁）、このうち支石墓について、佐原教授はシンポジウムをまとめた本の巻末の一覧表のなかで、大陸から伝来した要素とみなしている。これら墓制一セットを南インドと結びつける根拠は大野教授の研究の中心をなすはずの言語の対応例としてはタミル語、*tāri* と日本語 *taru* の例だけで⁽³⁰⁾（127頁）、その他の比較言語学的な根拠はいっさい示されていない。しかも佐原教授はこの樽は古代にはなかったと指摘しているし、単なる類似は考古学的に意味のない場合があることも指摘している。⁽³¹⁾つまり、この墓制についていえば、比較言語学の成果を考古学者が利用しないとの批判とはまったく関係がないことになる。考古学者に耳を貸さない大野教授が考古学者への痛烈な批判を述べるのは、大野説を補強する考古学的成果がみられないという単なるいらだちにさえみえるのは筆者だけだろうか。

墓制一セットに関してもう一言つけくわえておくと、たんに甕棺が似ているだけでなく、墓制一セットがすべて並行的にみられることを強調しながら、副葬品についてはまったくふれられていないのはどうしてなのだろうか。たとえば、吉野ヶ里遺跡からはガラス製管玉や有柄銅剣などの副葬品が出土している。結論だけ言えば、これらについてはさすがに大野教授自身も出所がはっきりして⁽³³⁾いて、南インド起源説を打ち出せなかっただけにすぎないと筆者はみている。つまり、大野教授が考古学的に反証があらかじめ予測されそうな文化事項は一応のぞいてから、南インド起源説の可能性を探ってきたことになる。そうだとすれば、副葬品と同様、もう少し考古学のデータ集めに熱心になるべきではなかったのか。

考古学データを軽視した結果、墓制以外でも、考古学が容赦なく大野説を打ち砕いている。大野説によると、稲は縄文晩期に南インドから渡来したことになる⁽³⁴⁾（244頁）。ところが、岡山の南溝手遺跡で、縄文後期（約三千五百年前）の土器片から稲のプラント・オパールがみつ⁽³⁴⁾かっているし、さらに同じ岡山県姫笹原遺跡から縄文中期（約四千五百年前）のプラント・オパールがみつ⁽³⁵⁾かったという。また、南インドと日本を結ぶ中間地の東南アジアではさらに古い時代に栽培稲があったことがわかっている。紀元前二千年紀に、タイ中部、フ

イリピンのルソン島、ボルネオ島のサラワクから栽培稲や農具が出土し、しかも石斧類の分布から中国南部から伝播したと考古学者は指摘している。⁽³⁶⁾この時代は残念ながらまだドラヴィダ祖語の時代で、タミル語は分岐していず、タミル人による稲の伝播の可能性はまったくない。また金属器のうち青銅器について、1987年に出版された『岩波講座日本考古学』によると、青銅器の最古のものは山形県の三崎山A遺跡出土の中国殷中期の青銅刀子で、縄文後期から晩期にかけての土器に伴うものというし、鉄器についていえば、縄文晩期の鉄斧は中国・朝鮮の鑄造斧の系譜をひくもので、直接的には朝鮮からの船載品と考えざるをえないと⁽³⁷⁾
⁽³⁸⁾いう。

以上、考古学の素人が論文等を読んでわかる範囲で大野説の反証をあげたが、考古学の専門家であれば、筆者があげた以外にもっと多くの反証を提示できるかもしれない。⁽³⁹⁾しかし、大野説の全てに反証をあげるのが筆者の目的ではない。大野説があげた証拠は並行関係といったものが多く、今や自然科学の助けて青銅器の化学分析や稲のプラント・オパール分析によって、⁽⁴⁰⁾日本の青銅器や稲との比較の精度が大変向上しているなか、金属器や稲を南インド起源とみるのはこれまでの考古学の成果をまったく無視することにほかならない。こうした強引さは大野説を受け入れてもらうためには逆効果であることは強調しても強調し過ぎることではないと思うが、いかがであろうか。

考古学からの問題点はこれぐらいにし、今度は民族学の問題点をみていこう。

上述のシンポジウムのなかで、民族学者大林教授は大野説の問題点を指摘しているが、その指摘以上に門外漢の筆者がつけ加えることはほとんどない。その発言を引用しておこう。⁽⁴¹⁾
「さっき佐原さんが、考古学の場合、比較には比較の方法があるんだとおっしゃったのと同じことなんで、民族学でも、こういう比較をする場合には、やはり分布の大勢を押さえるとか、そのうえで考えると、そういうことが必要なわけです」

と述べ、小正月行事の類似が南インドと日本以外でもみられることを指摘した後、さらにこう述べている。

「それをなぜ日本とドラヴィダだけ例をあげるのか。これは非常にアットランダムな例の挙げ方であって、あまり意味がないのではないかと思います」

大林教授には正月行事や稲作儀礼に関連した著作があるが、そのなかでは東アジア全体にわたって、正月行事や稲作儀礼を広い視野で比較検討している。⁽⁴²⁾一方、大野教授があげる日本の小正月行事の南インド起源説は、タミル語 **poṅkal** と日本語「ホンガ、ホンガラ」の対応語だけを核とし、南インドと日本各地の小正月の類似点をその根拠としている（103—107頁）。この二つの比較の仕方をくらべてみると、大野教授の比較がいかにアットランダムであるか、またどちらがより説得力をもつか、民族学者でなくともあきらかである。小正月行事の類似について、民族学の立場からは比較の仕方がいいかげんであるとの指摘で十分大野教授への批判となると思うが、こうした民族学者の指摘を待つまでもなく、大野教授の対応語自体にすでに問題があることを、言語学の立場からもう少し踏み込んで述べておきたい。

この比較はまず、「単語の比較にあたって意味の同一については厳格な吟味が必要である」

(23—24頁) という大野教授の指摘からいえば、大きな問題である。「ホンガホンガ」あるいは「ホガホガ」の意味は今ではわからないとのことであるが、『青森県百科事典』をみると、⁽⁴³⁾「ホガホガ」をこう説明している。

「豆ヌカとも豆の皮ともいうが、豆の香りの意であるという。酒粕や飴粕も用いた。これらのめでたい香りをただよわせて福の神を招き、穀霊によって魔性を払ったのであろう」

この「ホガホガ」の意味を《香り》と解釈すれば、『日本方言大辞典』にも「ホガ」の項に《香氣。におい》の意味が富山県、石川県方言でみられ、うまく説明がつく。また同じ辞典の「ホンガホンガ」の項では、《わき見をしながらゆっくりと道を歩くさま。また、やっと歩くさま》の意味がみられる。いずれの場合も、タミル語の《沸き立て、豊富に生まれろ》の意味とは異なる。大野教授自身、「二つの単語の意味が一致しているものと、意味がおよそ似ているというものとを区別すること」(22頁)と述べ、有効な比較と無効な比較の違いを指摘しているが、この比較ははたして有効なのだろうか。

また、以前から大野教授の日本の方言とタミル語を比べることへの疑問はいわれてきたが、⁽⁴⁴⁾この「ホンガ」や「ホンガラ」が古い文献で確かめられたわけではなく、青森の小正月行事の囃し言葉として残っているだけで、古代日本から現在までこの囃し言葉が続いてきたとは確認されていないし、確認する手だてもない。さらに、こうした囃し言葉に類する擬態語・⁽⁴⁵⁾擬音語などは音韻対応の例とはみなさないことは比較言語学のイロハである。つまり、この比較自体が言語学的にもかなり無理があり、こじつけであるといわれてもしかたがないのである。

言語学的な根拠の非常に弱い小正月行事の類似性については、上述のような大林教授の民族学的反論とあいまって、ほとんど意味を持たないと断言してもよい。大野教授が真剣に自説をあくまでも展開するおつもりであれば、アジア全体の正月や小正月行事へも目を配り、なぜ日本の小正月と中国との類似例では意味がなく、南インドとの類似には意味があるのか、ほんの一語の、しかも誰もが疑問を投げかける対応例だけを根拠とするのではなく、誰もが納得するような説明をする義務があろう。小正月の類似は大野説の初期の段階から一貫して主張されているが、対応語例が増えたわけでもなく、他の小正月との比較を試みたわけでもないのは、いつも「日本語＝タミル語同系説」の証拠の一つとして提示する割にはほとんどこの方面では努力していないことを物語っているにほかならない。とても残念である。

以上、言語学にはじまって、自然人類学、考古学、そして民族学のそれぞれの立場から大野説を検討したが、「タミル人渡來說」、あるいは「タミル語伝播説」は完全に否定できたと筆者自身は確信している。ここで強調しておきたいのは、これまでの検証からいえるのはあくまでも「タミル語伝播説」の否定であって、タミル語と日本語との広い意味での比較研究への否定を意味するのではないということである。

じつは最近、比較言語学ではかなり大きな語族と語族との間の系統関係が新しく提唱されたり、古い説が見直されてきている。たとえば、中国語とオーストロネシア語との系統関係が新たに提唱されたり、⁽⁴⁶⁾オーストロアジア語族とオーストロネシア語族との系統関係を提唱

したシュミット神父によるオーストロニック語族説の見直しが真剣に論議されるようになった⁽⁴⁷⁾、これまでの音韻対応だけではなかなか証明できない関係について積極的に取り組む機運が生まれてきている。とくに、オーストロアジア語族とオーストロネシア語族の系統関係⁽⁴⁸⁾は従来の音韻対応による証明ではなく、接中辞などの形態法によって証明を試みるなど、比較言語学にとっても新しい研究法が提唱されているのである。こうした文脈の中で、ドラヴィダ語と日本語との比較研究が押し進められるとすれば非常に大きな意義をもつことはまちがいない。またそうした位置づけで、将来大野説が見直される時期がくるかもしれない。そのためにも日本語とタミル語との比較だけでなく、ドラヴィダ語を視野にいれ、ウラル・アルタイ語族ばかりでなく、シナ・チベット語族から、オーストロネシア語族、そしてオーストロアジア語族にいたるまで、東アジアの言語史全部に目を配りながら、旧版の『日本語の起源』(1957)の網羅的な態度を堅持しつつ御研究を続けられるならば、かならず大野教授の御研究がむくわれる日がくると信じている。

注

- (1) ズヴェレビル (1990) によると、タミル語と日本語との類似を説明するのに四つのケースをあげ、(2)ではこう述べている。「考えられる可能性の一つは一言語から他言語への『直接』の借用です。……(中略)……。しかしながら、……直接の借用も除外されると私は考えます」(181-182頁)。
- (2) 注1であげた四つのケースの(4)を注意深く読めばわかる (ズヴェレビル 1990: 182-183)。長いのでここでは引用しない。
- (3) Zvelebil (1990: 99-103) を参照。関連する論文をあげておくと、O. Shrader (1935), T. Burrow (1943-46), K. Bouda (1956), S. A. Tyler (1968), K. H. Menges (1977), J. Vachek (1978, 1987, 1993) など。
- (4) Zvelebil (1990) はこれまでの研究をよくまとめている。
- (5) オーストロネシア語族の歴史を知るには、『言語学大辞典』の土田 (1988) の記述をみればわかるはずである。
- (6) 大野教授は『日本語の文法を考える』のなかで四母音説を展開しておられ、松本克己 (1975-1976) も内的再建によって、四母音説を述べている。しかし、奈良時代の上代日本語八母音説だけがコンセンサスの得られた定説である。なお上代日本語について、服部四郎教授は音韻論的解釈によって六母音素説を採っておられる (服部 1976)。
- (7) サモア語については、Mosel and Hovdhangen (1992) を参照。サモア語には能格現象がみられるが、音韻体系だけ都合のいい言語を選択すると、また説明をくわえなくてはならない現象が生じることも覚悟しておく必要がある。
- (8) デンプヴォルフのたてた子音体系は崎山 (1978: 112) が一覧表にしている。また、最近のRoss (1955: 57) の研究によればオーストロネシア祖語に、d, s, !/r の三つの反り舌音をとっている。
- (9) Blust (1984-84: 59)。

- (10) Pawley and Ross (1993 : 445)。
- (11) 母音調和とは母音の生起の仕方にある種の制限があることをいい、上代日本語にこうした制限がみられることが有坂秀世博士によって発見され、今日学会の定説となっている。
- (12) 大野 (1981 : 243)。
- (13) たとえば、東南アジアについては岩田慶治 (1991)、雲南については萩原秀三郎 (1990) など。
- (14) 埴原編 (1990, 1993) の埴原論文や尾本論文を参照。また、『モンゴロイドの道』(朝日選書) には「さて、日本列島でも古くは沖縄・港川人をはじめ縄文人、弥生人などの化石人骨が各地から発掘されている。いずれもモンゴロイドであり、現代日本人につらなる先祖である」(139頁) との指摘がある。
- (15) Risley (1908 : 43-45)
- (16) Hutton (1951 : 5-8)
- (17) 巨石文化については Heine-Geldern (1928) はインド・アッサムから東南アジアへの流れを想定したが、インドにはインドネシアの巨石文化の早期の段階にみられる遺物はなく、後期の段階の特徴である金属器を伴うことから、インドネシアからインドへと方向が考えられているという (Mahdi 1994b : 451)。なお Kim (1982) は日本や韓国の巨石文化はオーストロネシア巨石文化を起源とするという説である。こうした文献にも大野教授は目をむけるべきであろう。
- (18) Pawley & Ross (1993 : 445)
- (19) 大林編 (1985) のなかの生田滋教授の記述がある (165頁)。
- (20) Hornell (1920 : 225-246) の指摘による。ホーネルはマドラスの漁業局の局長を務めた人で、Hornell (1922, 1943) などの論稿は海上交通を考えるときにとても役にたつはずである。
- (21) Mahdi (1994b : 463)。なお Mahdi (1994a : 195) によると、タミル語 *lavankam* 'clove' もオーストロネシア語からの借用とみている。こうした借用語には注目すべきであろう。
- (22) 大野教授は次のように述べている。「今や、考古学は比較言語学の結果に目を配らなくてはならないはずである。さもなく、発掘物に対する愛着と固着に執するなら、考古学はそれが本来歴史学の一方法、一分野なのだという正当な立場を見失い、単なる『物マニヤ』に落ち込むことになるだろう」(84頁)。
- (23) Bellwood (1984-85, 1994)。とくに、後者の論文は比較言語学の成果を積極的に利用しようとする考古学者の姿を浮き彫りにしている。
- (24) Meacham (1984-85), Solhaim (1984-85) など。ここで問題となっているのは、考古学的な裏付けに欠けるが、比較言語学者のブラスト教授などが提唱するオーストロネシア語族の「中国南部源郷説」をベルウッドが支持していることである。
- (25) 大林太良・大野晋・小沢重男・佐々木高明・佐原眞『シンポジウム 弥生文化と日本語』(角川書店)。1990年。
- (26) 前掲書、105頁。
- (27) 前掲書、105頁。
- (28) 前掲書、114頁には橋口 (1979) をあげている。その後の研究として、橋口 (1993) がある。また藤尾 (1989) には文献目録がある。
- (29) 前掲書、114頁。

- (30) 前掲書、203頁。
- (31) 前掲書、146頁。
- (32) 前掲書、113-116頁。
- (33) 副葬品のうち、ガラスの管玉については、由水常雄東京ガラス工芸所所長によると、「中国の南部、長沙」（坪井清足監修 1989：38）で、また有柄銅剣については、近藤喬一教授は「朝鮮半島西南部の忠清南道」（坪井監修 1989：46）で、それぞれ作られたとみている。残念ながら、南インドにはまったく言及されていない。
- (34) 藤原宏志（1994：86）。
- (35) 高橋護（1994：42）。
- (36) 横倉雅幸（1992：305）。
- (37) 和田晴吾（1986：265）。
- (38) 潮見浩（1986：239）。
- (39) たとえば、今回まったくふれなかった記号文については、大野教授が参考文献としてあげている春成教授の論文（1991）は記号が絵画から発展していった過程を提示しておられる。独自に発展したものと外来のものが両立しないことはあきらかである。また、こうした記号文は中国にもないと大野教授は指摘しておられるが、素人目には長江流域の大溪文化の記号文などは牟永抗・余秀翠（1994）の紹介文や図表を見る限り、似ているようにみえる。ただし、筆者は記号文の総体についてまったく知らないので、本文では取り上げなかった。
- (40) 青銅器の化学分析については井上（1993）を参照。また、稲のプラント・オパール分析については藤原宏志（1984）を参照。なお大野教授は（注22）のなかで、考古学を歴史学の一分野とみておられるが、近年考古学はますます自然科学と接近していることを認識すべきである。考古学の自然科学の利用については馬淵・富永編（1981・1986）、『国立歴史民俗博物館研究報告第38集 歴史資料の非破壊分析法の研究』（1992）などを参照。
- (41) （注25）での前掲書、147-148頁。
- (42) 大林（1973）は大野教授が南インドと日本の並行関係を指摘している「カラスに物をあたえる」ことについて、朝鮮、中国、東南アジアの広い範囲から類似現象をあげて、分析している。また正月行事についても、大林（1992）で朝鮮や中国南部との比較を展開している。
- (43) 東奥日報編集『青森県百科事典』（1981年）、836頁。
- (44) 方言が古形を残すと言うのは柳田国男以来の方言圏論によるが、すでに昭和30年代から金田一春彦（1953）をはじめ、長尾勇（1956）などは方言圏論を機械的にあてはめることを批判し、方言が古形を残さない例をあげているが、現在では方言が古い形を残すこともあるが、いつも残すわけではないというのが学会のコンセンサスである。
- (45) たとえば、Annamalai（1968）など参照。
- (46) Sagart（1993, 1994）を参照。
- (47) Shorto（1976）、Diffloth（1990, 1994）、Hayes（1992b）など。
- (48) Reid（1994）、また土田（1989, 1990）も系統関係の指標として接中辞をあげ、リード教授と同様の意見を述べている。

参考文献

- Annamalai, E. (1968) "Onomatopoeic resistance to sound change in Dravidian", *Studies in Indian Linguistics* 15-19.
- Bellwood, Peter (1979) *Man's Conquest of the Pacific : The Prehistory of Southeast Asia and Oceania*. Collins, Auckland.
- Bellwood, Peter (1984-85) "A hypothesis for Austronesian origins", *Asian Perspectives* 26(1): 107-117.
- Bellwood, Peter (1985) *Prehistory of the Indo-Malaysian Archipelago*. Academic Press, Sydney.
- Bellwood, Peter (1994) "An archaeologist's view of language macrofamily relations", *Oceanic Linguistics* 33(2): 391-406.
- Benedict, Paul K. (1975) *Austro-Thai Language and Culture*. HRAF Press, New Haven.
- Benedict, Paul K. (1990) *Austro-Tai/Japanese*. Karoma Press, Ann Arbor.
- ベネディクト、P. K. 西義郎訳。(1985)『突破口：東南アジアの言語から日本語へ一日の神の民の起源―』東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所。
- Blust, Robert (1977) "Austronesian culture history: some linguistic inferences and their relations to the archaeological record", *NUSA : Linguistic Studies of Indonesian and Other Languages in Indonesian* 4: 25-37.
- Blust, Robert (1984-85) "The Austronesian homeland: a linguistic perspective", *Asian Perspectives* 26(1): 45-67.
- Bouda, K. (1956) "Dravidisch und Uralaltaisch", *Lingua* 5: 129-144.
- Burrow, Thomas (1943-46) "Dravidian Studies IV: the body in Dravidian and Uralian", *Bulletin of the School of Oriental and Asian Studies* 11: 328-56.
- Burrow, Thomas and M.B.Emeneau (1984) *A Dravidian Etymological Dictionary*. Second Edition. Clarendon Press, Oxford.
- Dahl, Otto Christian (1976) *Proto-Austronesian*. Revised Edition. Oslo.
- Dempwolff, O. (1934-38) *Vergleichende Lautlehre des austronesischen Wortschatzes*. Reimer, Berlin.
- Diffloth, Gérard (1990) "What happen to Austric?", *Mon-Khmer Studies* 16-17: 1-9.
- Diffloth, Gérard (1994) "The lexical evidence for Austric, so far", *Oceanic Linguistics* 33(2): 309-321.
- 藤尾慎一郎 (1989)「九州の甕棺―弥生時代甕棺墓の分布とその変遷―」、『国立歴史民俗博物館研究報告』第21集: 141-204頁。
- 藤原宏志 (1984)「プラント・オバール分析法とその応用―先史時代の水田址探査―」、『考古学ジャーナル』227号: 2-7頁。
- 藤原宏志 (1994)「稲作の起源を求めて」、田中琢・佐原真編『発掘を科学する』岩波新書。81-92頁。
- 萩原秀三郎 (1990)『図説日本人の原郷：揚子江流域の少数民族を訪ねて』小学館。
- 埴原和郎編 (1990)『日本人新起源論』角川選書。

- 埴原和郎編 (1993)『日本人と日本文化の形成』朝倉書店。
- 春成秀爾 (1991)「絵画から記号へー弥生時代における農耕儀礼の盛衰一」、『国立歴史民俗博物館研究報告』第35集：3-63頁。
- 橋口達也 (1979)「甕棺の編年的研究」、『九州縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告』第31巻：133-203頁。
- 橋口達也 (1993)「甕棺一製作技術を中心としてみた諸問題一」、『考古学研究』第40巻第3号：10-29頁。
- 服部四郎 (1976)「上代日本語の母音音系は六つであって八つではない」、『言語』5巻12号：69-79頁。
- Hayes, La Vaugh H. (1992a) "On the common morphological origins of word families in southeast Asia", *Linguistics of the Tibeto-Burma Area* 15(2): 185-202.
- Hayes, La Vaugh H. (1992b) "On the track of Austric: Part 1", *Mon-khmer Studies* 21: 143-177.
- Heine-Geldern, Robert. (1928) "Die Megalithen Sudostasiens und ihre Bedeutung fur die Klarung der Megalithenfrage in Europa und Polynesian", *Anthropos* 23: 276-315.
- Hornell, James. (1920) "The origins and ethnological significance of Indian boat designs", *Memoirs of the Asiatic Society of Bengal* 7: 139-256.
- Hornell, James (1922) "The origin of the Chinese junk and sampan", *Man in India* 2: 39-54.
- Hornell, James (1943) "Outrigger devices: Distribution and origin", *Journal of the Polynesian Society*. 52: 91-100.
- Hutton, J. (1963) *Caste in India*. Fourth Edition. Oxford University.
- 井上洋一 (1993)「青銅器の科学分析は何を明らかにするか」、鈴木公雄・石川日出志編『新視点 日本の歴史 (原始編)』新人物往来社。308-315頁。
- 岩田慶治 (1991)『日本文化のふるさと：東南アジアの民族を訪ねて』角川選書。
- 科学朝日編 (1995)『モンゴロイドの道』朝日選書。
- Kim, Byung-mo, ed. (1982) *Megalithic Cultures in Asia*. Hanyang University Monograph 2. Pyung-hee, Seoul.
- 金田一春彦 (1953)「辺境地方の言葉は果して古いか」、『言語生活』17号：27-35頁。
- 馬淵久夫・富永健編 (1981)『考古学のための化学10章』東京大学出版会。
- 馬淵久夫・富永健編 (1986)『続・考古学のための化学10章』東京大学出版会。
- Mahdi (1994a) "Some Austronesian maverick protoforms with culture-historical implications—I", *Oceanic Linguistics* 33(1): 167-229.
- Mahdi (1994b) "Some Austronesian maverick protoforms with culture-historical implications—II", *Oceanic Linguistics* 33(2): 431-490.
- Matisoff, James A. (1990) "On megalocomparison: discussion: note", *Language* 66(1): 106-120.
- Matisoff, James A. (1991) "Sino-Tibetan linguistics: present state and future prospects", *Annual Review of Anthropology* 20: 469-504.
- 松本克己 (1975)「古代日本語母音組織考一内的再建の試み」、『金沢大学法文学部論集文学編』

22: 83-152頁。

松本克己 (1976) 「日本語の母音組織」、『月刊言語』5 卷 6 号: 15-25頁。

Meacham, William (1984-85) "On the improbability of Austronesian origins in south China", *Asian Perspectives* 26(1): 89-106.

Menges, K. H. (1977) "Dravidian and Altaic", *Anthropos* 72: 129-179.

Mosel, U. and E. Hovdhagen (1992) *Samoan Reference Grammar*. Norwegian University Press, Oslo.

牟永抗・余秀翠。徐朝龍訳 (1994) 「長江流域の原始文字を探る」、『月刊しにか』5 (8): 38-47頁。

長尾勇 (1956) 「俚言に関する多元的発生の仮説」、『国語学』27輯: 1-12頁。

大林太良 (1973) 『稲作の神話』弘文堂。

大林太良 (1992) 『正月の来た道』小学館。

大林太良編 (1984) 『民族の世界歴史 6: 東南アジアの民族と歴史』山川出版社。

大野晋 (1957) 『日本語の起源』(旧版) 岩波新書。

大野晋 (1980) 『日本語の世界 1: 日本語の成立』中央公論社。

大野晋 (1981) 『日本語とタミル語』新潮社。

大野晋 (1987) 『日本語以前』岩波新書。

大野晋 (1994a) 『日本語の起源 新版』岩波新書。

大野晋 (1994b) 「日本語の起源について」、『月刊日本語論』2 (11): 68-84頁。

大野晋・小沢重男・佐々木高明・佐原眞 (1990) 『シンボジウム弥生文化と日本語』角川書店。

Pawley, Andrew K. and Malcolm Ross (1993) "Austronesian historical linguistics and culture history" *Annual Reviews of Anthropology* 22: 425-459.

Peyros, Ilya I. and Sergey A. Starostin (1984) "Sino-Tibetan and Austro-Tai", *Computational Analyses of Asian and African Studies* 22: 123-127.

Reid, Lawrence (1994) "Morphological evidence for Austric", *Oceanic Linguistics* 33(2): 323-344.

Risley, (1908) *The People of India*. Thacker, Spink & Co, Calcutta.

Ross, Malcolm D. (1995) "Some current issues in Austronesian linguistics", Darrell T. Tryon (ed) *Comparative Austronesian Dictionary: An Introduction to Austronesian Studies*. Part 1: Fascicle 1: 45-120. Mouton de Gruyter, Berlin.

Sagart, Laurent (1993) "Chinese and Austronesian: Evidence for a genetic relationship", *Journal of Chinese Linguistics* 21(1): 1-62.

Sagart, Laurent (1994) "Proto-Austronesian and old Chinese evidence for Sino-Austronesian", *Oceanic Linguistics* 33(2): 271-308.

崎山理 (1978) 「南方諸語との系統関係」、『岩波講座日本語12: 日本語の系統と歴史』99-150頁。

崎山理編 (1990) 『日本語の形成』三省堂。

Schrader, Otto (1925) "Dravidisch und Uralisch", *Zeitschrift für Indologie und Iranistik* 3: 81-112.

潮見浩 (1986) 「鉄・鉄器の生産」、『岩波講座: 日本考古学 3 生産と流通』岩波書店。237-262頁。

- Shorto, H. L. (1976) "The defense of Austric", *Computational Analyses of Asian and African Languages* 6: 95-104.
- Solhaim, Wilhelm G. II. (1984-85) "The Nusanto hypothesis: The origin and spread of Austronesian speakers", *Asian Perspectives* 26(1): 77-88.
- 高橋護 (1994) 「縄文農耕と稲作」、『東アジアの古代文化』81号: 42-51頁。
- 東奥日報編集 (1981) 『青森県百科事典』。
- 坪井清足監修 (1989) 『邪馬台国がみえる! 吉野ヶ里と卑弥呼の時代』日本放送出版協会。
- 土田滋 (1988) 「オーストロネシア語族」、『言語学大辞典: 世界言語編』第1巻: 1043-1057頁。
- 土田滋 (1989) 「語族再考—オーストロネシア語族の場合」、『三省堂ぶっくれと』80: 112-119頁。
- 土田滋 (1990) 「言語の系統関係とはなにか?」、崎山編。80-98頁。
- Tyler, S. A. (1968) "Dravidian and Uralian: the lexical evidence", *Language* 44: 798-812.
- Vachek, J. (1978) "The problem of the genetic relationship of the Mongolian and Dravidian languages", *Archiv Orientalni* 46(2): 141-151.
- Vachek, J. (1987) "The Dravido-Altaic relationship, some views and future prospects", *Archiv Orientalni* 55(2): 134-149.
- Vachek, J. (1993) "Lexical parallels in the Dravidian and Mongolian comparison", *Archiv Orientalni* 61: 401-413.
- 和田晴吾 (1986) 「金属器の生産と流通」、『岩波講座: 日本考古学 3 生産と流通』岩波書店。263-303頁。
- 横倉雅幸 (1992) 「東南アジアの初期農耕」、『東南アジア研究』30巻3号: 272-314頁。
- Zvelebil, Kamil V. (1990) *Dravidian Linguistics: An Introduction*. Pondicherry Institute of Linguistics and Culture.
- ズヴェレビル、カミュ・V。下宮忠雄訳。(1990) 「再びドラヴィダ語と日本語について」、大野・小沢・佐々木・大林・佐原著。174-183。頁